
理不尽から守ります。

kaits

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理不尽から守ります。

【Nコード】

N3262N

【作者名】

k a i t s

【あらすじ】

不良もどきの多い小学校へ通っていた大泉春希。この街にある中学校は不良が居座る学校がほとんどだったが、将来のことも考えて不良のいない平和な中学校はないかと探していると、喜瀬尾中学校という中学校を見つけた。その中学校は校則が他校より厳しいものになっており、そこなら真面目に勉強できそうだということでの中学校に入学することになった。

しかし、その中学校は想像以上の厳しさで、わかっているだけでも数百の校則があった。

すると突然、クラスメートの女が僕に声をかけてきた。女は、校則を少しでも破ると教師から生徒への暴言暴行が禁止ではなくないと伝えた。その他にもありえないような現実を言ってくる。つまり…校則を破るとその後が地獄のようになってしまう、ということか？

僕は教師からの理不尽に耐えることができるのだろうか

プロローグ

理不尽。それは強い力を持った者が一方的に主張を押し通すことである。ストレス社会とまで呼ばれるこの日本では理不尽がない会社など無い。みんな耐えて、上司にペコペコするのが普通だと思っている。実際、僕もそうだ。僕はまだ中学生ではあるが、学校は小さな社会。多少なりに理不尽は発生してしまう。四割はそこから逃げるためにタメな態度をとったりやや反抗的な態度をとったりし、三割はそもそも理不尽さに合わせようとして超真面目な態度をとって回避し、二割は言葉を素直に受け止めすぎてしまっただけで崩れていく。正しく理解し、自分で処理ができるのは一割もいるだろうか。

大人社会では殆どの人が耐えることができるであろう理不尽。中学生では受けとめきれない人がほとんどだから教師もそのへんは妥協してくれる。

しかし、僕、「大泉春希」の通う中学校ではそうでもなかった。

季節は春。寒さはだいぶ和らいできたが、桜の蕾はまだ固い。卒業シーズンを終えていよいよ4月に入ろうかというところ。

僕は人口二〇万人ほどのなかなか大きな都市にあるマンションに家族で住んでいて、来年からは晴れてピカピカの中学一年生になる一二歳である。外食店やスーパー、生活用品の店は十分にあるこの街だが、人口の割には時を楽しく過ごせるゲームセンターやパチンコ屋などの風俗店が非常に少ない。そのために退屈をする児童生徒が多いのか、どうもこの街には不良が多い。つい最近にもお友達と楽しく買い物中の中学生が怖い高校生の男に金を巻き上げられるという事件が起きたばかりだ。

僕はそんな不良にビクビクしながら小学校生活を過ごしてきた。

小学校にも不良もどきや不良卵と呼ばれる問題児が多くて、僕も迷惑を散々かけられた。そんな学校生活を知っている母は僕を労り、割と不良が少ないという中学校を見つけてくれた。そこなら真面目に勉強ができそうなので、その中学校「喜瀬尾中学校」へ入学することとなった。

その中学校はここから歩いて三〇分かかる。少し遠いが不良学校にいくよりは随分マシだ。

僕はこれから不良のいない素晴らしい学校で楽しい学校生活を送る…予定だった。

プロローグ（後書き）

こんにちは、初めまして。

人生初の小説です。

この小説は残酷な描写もなければ年齢制限もない普通の小説です。普通の小説なんですけど、読んでくださると私普通じゃない喜び方をすると思えます（何

それだけ、嬉しいってことです。

さて、今回はエピローグで短くなっていますが、本編では一話3000字程度で投稿していきたいなと思います。何度か読み返してから投稿するようにしていますが、日本語がおかしかったり誤字があったりするかもしれません。そこはお許しを。

それでは、これからもよろしくお願ひします。

第一話 入学

4月7日。僕は真新しい黒い詰め襟学生服を来て中学校の玄関にやってきた。校舎は10年ほど前に建て替えたばかりらしく、私立学校のような近代的な玄関は新しい雰囲気を感じさせている。玄関に置かれた机の上にあるクラス表を確認し、四階建ての校舎の三階へ向かった。

教室のドアをくぐるとそこには一五人ほどの生徒がいた。二、三人で話をするグループもいたが、それ以外の人はひとり椅子に座って黙っている。初対面ばかりなんだから友達がいなのは当たり前か。あの人達は小学校が一緒だったのだろうと自分で納得させ、僕もひとりで黙っているグループの仲間になった。この微妙な感じの空気は好きではないが、気軽に話してみようという気にはならん。

一〇分ほど経つと次第に席が埋まり、担任らしき大人が教室に入った。二〇代後半くらいのスレンダーな女教師だ。ウエスト付近に目が止まっていたが、不意にその先生と目があってしまった。僕はできるだけ自然に視線を泳がせる。

「うん、みなさんちゃんと来れましたね。」

教師から年齢相応なかわいらしい声が口からわずかに出る。

「じゃあ、みなさんおはようございます」

「おはようございます」

だらりとした声が返る。

「あれ？みんな元気ないですね。そのうち慣れてくるから今は何も言わないんですけど、今後はきちんとあいさつするように」

緊張で凍ってるのに元気であどけない声なんて出せるものなのか？なんか渋々許してる感じだし、意外と厳しいスパルタだったりして。

はいみなさん、まずはご入学おめでとうございます。この喜瀬尾中学校は、他の学校と比べて校則が厳しくなっているのはもうわかってますね。みんなが安心して学校生活が送れるようにするためにあえて厳しくしています。でも、普通に友達を作ったりして遊んでもですし、休み時間は体育館も開放しますからおもいきって遊んでも構いません。教室や廊下では走りまわらないでくださいね。ちなみに私は豊田瑠衣（トヨタルイ）といっています。みなさんこれから一年間よろしくおねがいしますね。そして、今日の今後の予定ですが、入学式はこの後九時から一〇時頃まで。その後、机の上に置いてある教科書などに名前を書いたりまた連絡を伝えたりして四〇分ほど学活をした後に、二〇分間掃除をして帰宅という流れになります。入学式は体育館で行ないますが、椅子はもう準備してありますから何も持っていかなくてもよいです。∴それでは、そろそろ廊下に出てください。あちら側から身長順に並んでください。今は細かいことは気にせずに大体の順番に並んでください。

「それじゃあ廊下へー」

やはりさすがだな。中学一年生に対しては親近感を持ってもらいために少し崩したあいさつになるのだが、全部敬体だった。妙に友好的な教師は苦手だからこれはこれで良いか。

廊下に出て身長を頭に手を当てて比べる人がいたが、真ん中より小さめという位置に一〇人も似たような身長の人がいた。僕もその一人だろう。適当に四番目くらいに入った。小声でよろしくとうしろの人に声をかけてみたが、返事はくれなかった。せめてうなずくとかなんかしてくれ。

長い入学式は腰と尻に負担がかかる。幸いクッションが効いたパイク椅子だったからまだ良かったが、来年は教室の椅子で行うとなると、少しぞつとする。祝電披露やら校長のおはなしやらで半分以上が使われ、最後に聞いたこともない校歌を聞こえてくる上級生に合わせながら歌い、入学式は終わった。特に変わったことのない平凡な入学式だった。

教室に戻ると、全員の机の上に深い緑色の小さなメモ帳のような本が一冊足されていた。校則をまとめたものらしく、今年に変更された校則が多かったために印刷が遅れたのだそうだ。中をさっと見たところで生徒会や部活動、制服等について書かれていたがすべてを読む気にはなれなかった。長すぎる。最後の方を見ると第一七五条とかだ。こんな数百の校則を覚えるなんて不可能だろ。半分くらいは常識でカバーできるとして、この学校独特の校則は覚えれる気がしない。豊田先生だったかな、その可愛い美貌から「守らないとそれなりの処置が取られるから注意してください」とそんな淡々と言われても。

教科書に名前を書き、プリント類なども受け取って掃除になった。予想以上に多い校則についたため息が出てしまった時、一人の女が声をかけてきた。

「あの、えっと、大泉…」

「春希です」

顔を見ると、その女の子はクラスメイトだとわかった。小さめの襟のセーラー服に紅色のスクarfをきちんと結んでいる。女子の制服は着にくいと聞いたことはあるが、この人は割としっかり着こなしていた。

「あ、春希くんね」

「どうしたの？」

「あ、その、学校初日なのに溜め息ついてたから、大丈夫かな…って」

「ああ、心配してくれてありがとう。でも、大丈夫だよ。あんまりにも校則が多いからさ」

「ならよかった。あたし、中上氷咲なかがみ ひこさきっていうの。自慢じゃないけど、校則、全部覚えてるよ」

「うん。って、ええ？今なんて…」

「だから、中上氷咲だつてば」

「いや、そのあと」

「校則全部覚えてるけど…」

「え、マジですかい」

「はい！マジです。ちなみに第六〇条くらいにマジとか超イケテルとかヤバイとかいう若者語わかものごを使つてはいけないって言う則があるから注意ね」

何だ？この人。監督生か？でも、中学に監督生がいるなんて聞いたことねえぞ。

「うえ、マ…あー、本当ですか…。」

「あたし、春希くんを守るように言われてるから、これからもよろしくね！」

「ああ、わかつたよ」

氷咲はそれじゃ！と言つて足早に去つてしまつたが、今僕を守るように言われてるとか言つてたような…一体どういう事だ？僕はそんなこと初めて聞いたぞ。大体、なんで守られなきゃならないんだ？ドツキリか、ドツキリなのか？いや、こんな初日で初対面にドツキリする奴なんていないぞ。それに…

「大泉くん、早く掃除場所に行こうね、君の場所はどこだっけ？」

いきなり声をかけられて驚いたが、豊田先生だった。

「あ、すいません。えっと、中央階段です」

「よろしい」

僕は雑巾を持ち、階段に向かう。僕はどうも嫌なことになっていきそふな気がしてならなかつた。

下校時、またあの氷咲がハイテンション気味に話しかけてきた。

「やあー春希くん元気ないね、ほら、もつとシヤキつとして。」

またこの人か。一体なんなんだ？妙に馴れ馴れしいし、校則全部覚えという並々ならぬ記憶力を持つてるし、それに、どうして僕なんかを守るんだ。さつきも自問自答してたが、今訊いたほうがいいだ

るうか。どうだろうか。

「まだ馴染めないみたいで…」

「んー、まあ初日だし、仕方ないっか。で、春希くん今からどこへ行くの？」

「どこって、家だけど」

「え？家に来てくれるの？わーあたしもうちに来てほしいって誘うところだったの。春希くんって勘がいいのね。ちなみにあたしのうちは…今から案内するね」

おいおい、僕は家に行くとした言っただろ。下校時に家に行くと言ったら自分の家に決まってるだろうが。さっきのセリフから氷咲の家に行くことへ繋げるなんて無理矢理過ぎる。それに恋人でもないのに女の家なんて行けねえよ。

「あー、なんであなたのお家に…」

「えー！なんで？もしかしてあたしのうちに来たくない？嫌なの？嫌ならいいんだけど、その…」

「正直嫌というか初対面の女子の家に行くことに抵抗感があるんですけど」

「来なかつたら、絶対、損するよ」

氷咲の声が急に小さくなる。

「え、なんて？」

「来ないと、損するよ」

「なんで損をするんだ」

確かにいろんな意味で得はするかもしれないが、行かなくなつて損をすることはなじゃないか。それにデートしてるとか噂になつてもらつては今後の学校生活に支障が出る。

「それは…ここでは言えない」

「なんでさ」

「と、とにかく来て！」

強引に腕ごと引っ張られた。こいつ意外と力が…

「あー、いて、い、い痛えよ」

氷咲は黙ったまま真剣な顔をしている。マジなのか。わからないけど、力を抜いてその方向に引つ張られることにした。

やがて学校の敷地から出た。途中からは一緒に走っているような感じだったが、敷地から出た途端に氷咲が止まるもんだから体が追突しそうになった。急に止まるな急に。

「はあ、一体なんなんだ？」

「ごめんなさい、今言うね。この喜瀬尾中学校の敷地内には無数の無指向性マイクロマイクが設置されていて、そのデータは全て職員室に送られて常に録音されているの。だから、敷地内では不用意になんでも喋るとまずいの。」

「えっと…」

「あ、ごめんごめん。つまり、敷地内の声はすべて誰かが聞いているってことよ」

それはいくら暴言がダメだったり嘘がいけなかったりするからってやり過ぎだろ。プライバシーというのではないのか。

「それだと確かに喋りづらいな。それで、その喋るとまずかったことって言うのは何だ？」

「それは…」

氷咲はここでもまた家に来いと言い出した。人が多いから言いにくいんだそう。そんなに大事なのかい、こんなに…ちょっと過剰だけど平和そうな学校になにかあるとは思えないし、僕は誰かに狙われるような人でもない。

「やっぱりお願い！春希くんのためなの！あたしのうちに来て」

そんなセリフ言われると断れなくなるじゃないか。おまけに頭を最敬礼の位置まで下げてきやがった。周りの視線がこっちに集まっているぞ。やめてくれ。僕が謝らせているみたいだからやめてください。

「あーわかったわかった行くから」

「ほんと！？ありがとう」

氷咲は途端に明るくなってこっちこっちと指さしながら歩き出した。なんだかんだで家に行くことになってしまった。僕の親は共働きで、先に帰ってくる母も帰ってくる七時くらいだから、それまで行動は自由だ。どこ寄り道してたの？なんて問い詰められることはない。ある意味幸運か。

第二話 一通の手紙（前書き）

前話の御復習おくりあらい

平凡だった入学式を終えて、机の上に追加された手帳のような緑の本を見るとそれは校則ブックであった。数百の校則がびっしりと書かれている。そして、中上なかがみ 氷咲ひびさきという女に声をかけられた。校則を全て覚えていたという氷咲は突然僕を守ってやると言い出した。その詳細は学校や人前では言えないから家に来て欲しいという。僕は一応抵抗したが、なんだかんだで行くことになってしまった。

第二話 一通の手紙

学校から一〇分ほど歩いただろうか。洋風の新しいめな家だ。ここがあたしの家、と氷咲が玄関の戸を開ける。マンションの扉は開け閉めの際に油の切れた鈍い音がするが、この扉は無音で開いた。すこし妬ましい。俺もこんな家に住みたいもんだ。

中はきちんと掃除されていて、フローリングもしつかりとコーティングされていた。荷物もほったらかしにはしていなく、玄関からは物が何も見えなかった。まるで引越してきたばかりみたいだ。

「中上さんって最近引越してきたんです？」

「やだなー、氷咲でいいよ。それに同級生なんだから敬語はやめてちょうだい」

なんだか無理やり仲良くさせられている気がする。

「あーすまん。氷咲は最近こっちに来たのか？」

「最近っていつても五年くらい前からここに住んでるよ」

「へえ…」

氷咲の部屋は二階にあるため、階段を通らなければならぬがその途中、左手に居間があった。氷咲はただいまあ！と部屋の中に声をかけた。おいマジかよ。お前の母さんか父ちゃんいるのかよ。そして不覚にも部屋の中にいた三〇後半くらいの女の人と目があってしまった。きつとお母様だろう。

「お、おじやます」

軽く頭を下げてすぐに階段に向かった。その女はきつと五秒くらい固まっていただろう。誰なんだこの人は、初日に彼氏なんてできるわけ無いし、もしか…なんて思われてるかもしれん。お母さん、僕は普通の中学生ですよ。勘違いしないでください。

氷咲の部屋についた。中に入るとほんのりいい香りがした。女子の部屋なんて入るのは初めてだ。六畳ほどの洋室には薄いピンク色のカーテンに可愛らしいぬいぐるみや水色のデスクマットがしかれ

た学習机、その他女の子っぽいものがいろいろあった。女子ってこんなもん持ってるんだな…。気づくと僕は学習デスクに飾られている青髪ロングにイコールオメガイコール顔のフィギュアに視線が向いていた。

「春希くんって、もしかしてソツチ方面興味あるの？」

「い、いや、ないない。決してそんなことはないからな」

むしろ僕の方がアニメ好きなのか？と訊きたかったが、氷咲の機嫌を斜めに曲げそうなのでやめておいた。

「ふふ、隠しきれてないよー」

薄々いい心地がいい部屋だとは思っただけだ。新鮮で、居ても飽きなさそうだ。単純にそう思っただけだ。隠し事など無いぞ。

「それで、話なんだけどさ」

ようやく本題が始まるのか。さて、学校でも言えず人前でも言えないこととはなんだろうか。まさかずっと前から好きでしたーなんてオチはないよな。

しかし、そんなかわいらしい話ではなかった。

「さつき外で無数のマイクがあるって話したよね。」

「ああ」

「他にもあの学校にはいろんな仕掛けや機械が設置してあるの。中にはありえないものまであったけど、校則を守らせるためとしてなんでも買うことを市が許してしまったみたい。今ではこの北陸一体を支配できる力を持っていると言われているの。」

そんなすごい学校だったのかあそこは。日本全国を支配ではなく、北陸のみというのがなんと本当っぽい。

「元々は普通の真面目学校だったんだけど、だんだんエスカレートしていったいつの間にか生徒を苦しめるほどの学校になっていったの。今日配られた緑の本の校則は一部にすぎないわ。実際は数千の決まりごとが決められていて、三年間の中でその校則を守れたものは一人もいない。みんな、何らかの出来事で破ってしまい、処置を

取られたわ」

「生徒を苦しめる？どういうことだ。まさか、注意を受けることが苦しめることだなんて言わないでくれよ」

「そんなわけないでしょー。極秘にされているから報道でも伝えられてないけど、校則を破った時の処置って言うのはその場では直接的にはないの。注意を受けたあとにまるで村八分のような扱いを受けたり、奴隷扱いされたりしてしまうの。教師から生徒への暴言暴行なんてあたりまえだわ」

「その生徒が卒業したらずぐにその情報が広まっちゃうじゃねーか。なんで何も知らされないんだよ」

「さつき言ったでしょ？情報は極秘にされているって。万が一外部に漏れても学校が所有している大量の資金の一部を支払って口止めしているの。…きつと春希くんも抵抗もできずに三年間地獄の思いをするとおもうわ。明日から苦しい思いをする人だって出てくるかもしれないの」

「地獄の思い」

「うん、だから、あたしが守ってあげるの。あたしが守って、春希くんを助ける」

お、そうだ。肝心なことを訊かなければ。

「あのさ、守ってくれるのは感謝するけど、なんで氷咲が俺を守ることになってるんだい？俺の親が秘密でお願いでもしたのか？」

「ううん、違う。その、んっ…」

氷咲は言葉を濁らせる。

「あたしが決めたの。この人を守るって」

「つまり、僕はたまたま氷咲に選ばれたのか？」

「たまたま！？えっと、それはその…」

顔がほんのり赤い。なんでここで照れる必要があるんだ。

「あ、あたしが春希くんなら守れると思っただし、ちよつと見た目も良かったし…偶然なんかじゃない」

そりゃよかった。生まれて初めて見た目を認められたよ。

「わかった」

こんな冷静に対応してるけど、内心はとても嬉しいぞ。

「ありがとー、じゃあ…スマブラでもしない？あたし強いよ」

得意げに笑う氷咲。wiiの電源を入れてスマブラことスマッシュ
ユブラザーズXを起動させる。

氷咲はマルスを選んだ。女はピカチユウとか選ぶもんだろぅが、
ちよつと本気かもしれない。僕は遠距離攻撃ができるファルコを選
んだ。直接攻撃しかできないマルスには有利なはずだ。ステージは
やっぱ終点だよなー、とカーソルを上を持っていく。終点いいよな
と僕が返す。

試合が始まった。適当に遠距離からじわじわ行こうと思ったが、
マルスは素早くこちらに近づく。最初に打ったブラスターは外れた。
接近戦だとマルスの方がリーチが長めだ。

ダッシュしたあとに小ジャンプしてやってきた。上から攻撃する
つもりだ。上方向の攻撃ですぐ出せる技でなおかつ剣に勝てる技は
…ない。ファルコはガードを張った。マルスはそれを察知し、もう
一度ジャンプをした。空中ジャンプだ。空中ジャンプはジャンプ力
が弱いので大して高さを得られない。ファルコは少しだけ右へダッ
シュしてすぐに上スマッシュ。ジャンプ直後で緊急回避が遅れたマ
ルスは攻撃をもろに受ける。しかし、まだまだ序盤。マルスはすぐ
に空中で下攻撃をだして反撃した。ファルコは左に緊急回避して避
ける。マルスの空中した攻撃は攻撃中に床に着くと一秒弱怯んでし
まう。ファルコはそれを見計らって床に着地するかどうかのタイミ
ングでダッシュし、そのまま右へのダッシュ攻撃。またもやヒット
した。よし、連続で攻撃をあてたぞ。

やがて二分のタイム戦が終わった。結局あの後、マルスの連続攻
撃にはめられてしまい、ファルコもなかなか抜け出せずになんども
倒されてしまった。結果は-1対1で負けた。

「おー、なかなかやるじゃん」

「氷咲って強いんだな」

「そりゃー毎日やって鍛えてるもん」

「え？毎日」

「うーんうーんなんでもない！」

氷咲は首を大きく振って、もっかいやる！と言った。そのあとでゲームで遊び通した。途中で昼ごはんにおにぎりも頂き、結局四時間色々なゲームをやり続けた。

視力は落ちてないだろうか。小学校から六年間なんとかAAを守ってきたが最近ギリギリな気がする。確実に視力は1.5から1.1くらいに落ちてる。ゲームなんかやってたら一代の寿命が縮んでしまう。

「こんなにゲームやって疲れないのか？」

「全然疲れないよ？だって楽しいじゃん」

視力が落ちるなんて日本語は知らなさそうだ。

その後は一緒に本を読んだりお喋りをしたりして過ごした。そして何時の間にやら陽は傾き始め、時刻はもうすぐ六時というところになった。

「俺、そろそろ帰るかな。暗くなってきてるし」

「あ、うん。今日はありがとねー」

「ああ。じゃあな」

「バイバイ」

全く、無理に連れてこられてどうなることやらと心配はしたが、意外と普通の女の子じゃないか。明るくて楽しい人だし。でも、なんで喜瀬尾中学校のについて詳しく知ってるんだろう。校則も本気で全部覚えていそうだし。んー、親が学校関係者とか。とりあえず明日にでも訊いてみるか。

僕は通学カバンを背負ったまま自分の家に向かった。教科書が入っただけしりと重い。これをあと2kmも運ばないといけないと思うと足取りも重くなる。その道中、氷咲が言っていたことを思い

出す。生徒を苦しめる学校か…しかもそれが金で口封じされてるってかなり危なそうだ。僕はそんな中学校に通って大丈夫なのか？でも、氷咲は守ってくれるって言うてるし。まあ彼女を信頼してもいいかな。

氷咲の家を出てから自宅につくまで四〇分もかかった。足がしんどい。

「ただいまー」

返事はない。母はまだ帰ってきてないようだ。郵便受けになにか封筒があつたので手にとつてみると、送り主には喜瀬尾中学校 豊田瑠衣と書かれていた。なんだこれ。僕宛だからあけてみるか。

「こんにちは、私はあなたの担任の豊田です。今日初めてあつたばかりですね。これからよろしくお願いしますと言いたいところなのですが、そのためにこの手紙を書いたわけではありません。あなたは校則を初日から破つてくれました。下校時にこの学校の女の子と一緒に歩いていてその人の家に入ったでしょう。学校関係者がしつかりと見つけています。喜瀬尾中学校則第一二一条の下校時の約束事にきちんと書かれています。一回目だからといって見逃すわけにはいきません。明日学校に来るときには、それなりの覚悟と心の準備をしてきてください。

厳しい言葉を並べてしまいましたけど、失敗にめげずにこれからも頑張ってくださいね。私たちはあなたの成長を応援していますよ。」

急いで緑色の本を開くとちゃんと一二一条に書かれていた。下校時はすみやかに自宅に帰り、他人の家に入ったり店に入ったりしてはならない。ただし学校が特別に認めている場合はこの限りではない。

「ああああ、明日学校行きたくねええ…」

第三話 最初の落下者（前書き）

前話の御復習おくりあらい

僕は氷咲の家に行き、北陸一体を支配できる力を持っているだとか生徒を苦しめるほどの学校になっていったとかの話聞いた。それは極秘にされており、決して外部にはもれないらしい。そして、僕を守ってくれるというのは見た目も良かったからというのも理由に含まれていたと告白され、つい嬉しくなる。その後ゲームなどで時間を潰し、自宅に帰ると一通の手紙が。その手紙は校則を破ったから明日処罰を与えますというものだった。

第三話 最初の落下者

そして次の日。それなりの覚悟という言葉が脳内に何度もよぎり、重たいかばんを余計に重たく思わせている。学校に着くまであと一〇分ほど。次第に心拍数が上がっていくのが自分でわかった。

気分落胆のまま教室に入った。そういえば氷咲の席は、と座席表を確認する。僕は廊下から二列目の前から二番目。氷咲は僕の左の列のいちばんうしろすなわち廊下から三列目の前から六番目だ。すると、氷咲がやってきた。わざとらしく目をキョロキョロさせて座席を探している。

「あ、春希くん！」

クラスのざわめきが何秒か静まる。クラスの前ではそんななれた口調で話さないで欲しい。

「昨日、あれからなにかあったあ？」

「お前のせいでこんな手紙が来てたぞ」

首を傾げる氷咲に昨日の手紙を見せる。

「あー！こ、これは校則を破ったものに届けられるという恐怖の手紙ではないかー」

「ばか、クラスの前で堂々とそんなことを言うんじゃない。どこからか「大泉くんだよな？あれ」とか「おい、あいつもう破っちまったのかよ」なんてささやき声が聞こえる。

「なんとかならないのか、お前は俺を守るとか何とか言ってたよな？」

僕が小声で伝える。

「え？なんのことかしら。破っちゃったんだから思いっきり叱られてきなさい」

マジかよマジかよマジかよ。本気でそれ言ってるのか？破ったら村八分とか奴隷にされちまうんだろう。そこから僕を守ってくれるっていったじゃないか。やっぱりあれは嘘だったのか。ドッキリだ

ったのか。あー知らない女なんて信じるんじゃないかった。

恐怖のショータイムの始まりだ。豊田先生が教室に入ってくる。

「えー、みなさん。突然ですが実はこの中にいきなり校則を破ったバカモンがいます」

ざわざわしだす教室。心なしか皆の視線が僕に集まる。

「それは、そこにいる、大泉だ。こいつは昨日、なんと…」

昨日は大泉くんだったのに呼び捨てになっている。案の定だがクラスの九割がこちらを見つめてくる。僕はどうすればいいのかわからずオロオロしていると氷咲が突然立ち上がった。

「せんせー！あれは私のせいです。私が昨日、無理やり大泉くんを連れていったから…。とにかく、私の責任なんです」

な、そこまでしなくても。全責任を氷咲に預けるわけにはいかない。第一破った張本人は僕じゃないか。なら僕が悪いに決まってるじゃないか。

「あ、あら…：そうなのですか？」

僕はあの、っと遮ろうとしたが

「なら仕方ないですかね。今回だけは見逃しましょう。一回きりですよ？」

なんと、免罪されてしまった。こんなあっけなく免罪されるなんて思っても見なかった。なぜだ。校則違反者は厳しい処罰のはずだ。なぜ許されるのだ？

頭で状況を理解できず、必死に理由を考えるが何一つ浮いてこない。

そして、無事HRを終えて休憩時間となった。

「おい中上ー」

訊いてみるしかない。

「どうしたの？春希くーん」

「とりあえずクラスの前とかではそのハルキクーンとかそういう言葉遣いはやめてくれんか。勘違いをうむだろ」

「ごめんごめん」

「それと、なんで俺をかばったんだ？さっき叱られるっていったじやん」

「あれ？昨日あたしが言ったこと忘れた？」

「なんだっけ。」

「むやみに何でもしゃべっちゃいけないの」

あ、そうあだったな。確か無数のなんとかマイクがあるとか言っていたな。校舎内では守ったからとか真実を口にするとか確かにまずいな。なら、やっぱり、氷咲は本当に僕のことを守ってくれるのだろうか。さっきみたいに責任を負ってくれるのは申し訳ないけど、助かる場面も多いだろう。

「だろう」を「のは確実だ」と訂正しなくなったのは3時限目のことだった。

数学の授業だったのだが、クラスの一人がなんと数学に必要なものを一式すべて忘れてきてしまったのだ。それは大人しそうですらつとした女の子だったが、当然先生は容赦なく檄を飛ばす。男の筋の通った声が先生の腹からクラス中に響き渡った。その女の子はうつむいたまま「すいませんでした」と小さな声で謝った。しかし、先生は許す素振りも見せずその女の子を廊下へと連れだした。早足で歩きながら、教室を出る時に「教科書の最初の方を黙読していなさい」と言い残した。僕は真面目に正負の数という単元名のペーヂを読んでいった。さっきの女の子はまだ戻ってこない。教室のドア越しに先生の姿が見えるが、声は聞こえない。きつと問いかけるように追い詰めていると思うが、あの怖い教師はどんなことを言っているのだろう。口から恐ろしい言葉を吐き出されるとさすがの僕でも涙が出そうな気がする。そして5分以上たつてようやく戻ってきた。先生は「授業の開始が遅れてしまって申し訳ない。では、号令」と淡々と saying していたが、女の子は泣きじゃくんでいた。流石に

うえーんとは泣いていないが、息が詰まってヒクヒクとなつて
いるのはわかった。クラス会長が「気おつけ、礼」といい、それに
続いて皆が一礼して「お願いします」とあいさつして授業は始まる
のだが、あるうことか数学教師は泣いている女の子に「しっかり声
出して挨拶をしるお！」をまだ追い込むのだ。号令はやり直しとな
った。しんと静かな教室にはかすかにグスツと鼻を嚙るが聞こえる。
授業開始時刻から10分遅れてようやく授業が始まった。

3時限目は一気に加法のやり方まで進んだが、正負は日常からよ
く使っているのでなんとか理解できた。しかし、先程の女の子はま
だ立ち直れていない。先生のやり過ぎではないか、あれは。先生の
アフターケアをしてあげなければならぬだろう。授業が終わって
数学の先生は女の子をまた呼び出した。先生が何を言うのか、盗み
聞きするわけじゃないが聞こえるとこまで廊下側に移動した。しか
し、そこで現実を知ってしまう。

君の態度は私には気に食わない。教科書を忘れるということはこ
の私をなめているということなんだぞ。それがわかってるのか。そ
れにお前の謝り方。日本の常識をしらんのか。下むいて聞こえない
ような声で謝っても無駄だぞ。あん？おまえ、もしかしてさつきは
仕方なく謝ったのか？自分のプライドなんか持って最小限の謝り方
で済まそうとしたのか？そうなんだ。おまはこれっぽっちも反省し
ていない。いいか、放課後4時30分に職員室前に来なさい。わか
ったな！

あ、あれが生徒に対する教師の言葉なのか？単に一方的な被害妄
想というか拡大解釈で生徒の罪を重くしてるだけじゃないか。あんな
のが教師でいいのかよ。それとも僕の教師という概念が間違つて
いるとも言うのか。僕は氷咲に聞いてみた。

「おい中上、さっきの奴って…」

「あー、運が悪かったね。あの人は。こんなに早く落下者が出ると
は思わなかった」

被害にあった人を落下者というのか。

「教師は慰めの言葉とかかけないのか」

「するわけじゃない。むしろ逆でしょ」

なんてこと言いやがる。普通なら全国ニュースにも出るくらいの大問題だぞ、そりゃ。

「あ、ああ。それと、朝はありがとな」

そういえばお礼を言うのを忘れていた。僕は豊田先生に許されていなかったらどうなっていたのだろう…。そう思うと自然と氷咲に感謝の言葉がでる。

第四話 会長

午前の授業が終わり、待ちに待った給食の時間になった。午前中は色々であり、空腹感を感じなかったがここで緊張がとけた。カレーのいい匂いが教室の中に漂う。はじめの給食はカレー。もはや定番か。

給食をどういう流れで受け取るのかは知らなかったが、というか説明なんてあっただろうか。どうしてかみんなはスムーズに自分のおかずやカレーをよそっていく。僕も皆と同じようにお盆を取り、おかずのウインナーとお浸しを皿に入れた。普段はそんなにたくさん食べる方ではないのだが、この日は腹が減っていたのでカレーはいつもより少し多めに入れた。

そして重量が増したお盆を両手で持ち、席へと戻った。早く食べたい。

全員の給食が配布されたことを確認し、豊田先生がいただきますの号令をかけると思ったのだが、

「それでは、席を六、七であわせてグループになってください。クラスの中の友好関係を早く築いてもらうためにグループになって仲良く食べましょう」

と言った。僕は机を左に向けた。列ごとに男女がはっきり分かれていたため、左右は男、前三人は女の六人グループになった。

右と真ん中の二人はなんやらひそひそ話をし始め、もう一人は頑なに下を向いたままだ。一応、左右の男にも目をやったが左は汗っかきのぼっちゃりで右は身長がでかくて少し長めのスポーツ刈りだ。うん、右の男となら関われそうだ。

「それでは、いただきます」

挨拶については昨日の朝に注意を受けているので今回は元気のいい返事が聞こえた。

僕はカレーから手をつけた。甘口で刺激がなかったが、なかなか

まるやかでうまい。甘口をなめていたがいけるかもしれん。

カレーの三口目を食べようとすると僕の右腕と右の男の左腕がぶつかった。お互い顔を見合わせたが、原因はすぐに分かった。スプーンを持っている手は左手。彼は左利きだったのだ。

「お、わりい」

彼は少し砕けた言い方でかるく謝った。

「いや、別に気にしないから。変に気を使わなくてもいいよ」

「おうセンキュー！」

特徴的な人だ。緊張の色一つ見せてない。この様子からしてO型と悟る。彼の名前はなんだったかなと名簿を確認するとその男は追崎という苗字だった。

小さなきっかけではあったが、初めて氷咲以外のクラスメートと話した。案外こういうのが友達としての第一歩だったりすることが多い。果たして僕は友達は何人できるだろうか。とりあえず0だけは避けたいな。氷咲を抜いて。

給食はあつという間に食べ終えてしまい、待っている間暇になった。となりの追崎さんも暇そうだったので声をかけてみた。

「ね、追崎って小学校どのへん？」

素直に答えてくれるかと思っただが、追崎は口到人差し指を立ててシートと口で音を出した。続けて食事中はしゃべっちゃあかんことになってるだと小声で補足した。まさかとは思っただが、例の緑の校則ブックを開く。目次を地道に探していると一二〇条くらいと追崎が言ってくれた。こいつも校則に詳しいのか？見ると一一八条だった。若者言葉がうんぬんの三条手前。給食中も他の人が食べ終わるまでは私語を慎むこと。細かいな。ま、話しかけるのは昼休みになっただけからでもいいか。

一〇分後。僕は追崎が昼休みになっても席を立たないことを確認して、声をかけようと立ち上がった。そのときだ。氷咲がねーねー

つと声を出した。対象とされているのは僕だ。

「ん、なんだ？」

しかし、本当の対象は後ろにいた…佐藤とかいう人であった。若干恥をかく僕。

「はい、なんでしょう中上さん」

ぼつちやりからは声変わりをしかけているような声が発せられた。無理に高い声出してる感がすごい。

「あ、またアレ描いてよ。結構うまかったから」

「はい！中上さんのためなら何枚でも書きます」

まだ登校二日目で緊張関係の続いているクラスであるのに、氷咲と話している奴は妙に打ち解けていた。小学校でも同じ学校だったのだろうか。

僕はせつせと佐藤が右手に持った鉛筆で何かが描かれていく様子を見守った。一体何を書くのだろうか。

五分ほど経つと、それは人であることがわかった。足は少し交差させていて片足は浮かせている。左手は腰に、右手は顔の方で横にピースサインをしている。

さらに五分。佐藤は顔を仕上げていった。ていうか目がでかい。顔の三割くらいはあるだろうかという目を細かく書いていく。この様子からしてアニメキャラか。

描き始めてから二〇分ほど。あつというまに一人の女性のキャラクターが完成した。ん？これ、どっかで見たことあるぞ。えつと…なんだったかなと記憶をたどる。そうだ、あの氷咲の部屋にあったフィギュアのキャラクターだ。目は違うものの、青髪に（おめが）の口である故に同一人物の可能性は高い。やはりあいつは幸運星が好きなのか。

ここで昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。しまった、僕は昼休みを追崎との会話に当てる予定だったのに。つい描かれる様子を夢中になってしまっていた。まあ、また今度でもいいか。

やがて今日の最後の授業、理科が始まった。理科の教師は四〇代のおっさん。

3時限目のときのあの女の子はもうなんとか立ち直っていた。少し刺激すると泣きそうだが頑張って板書を写している。

授業は終始静まり返っていた。教師が質問を投げかけるようなタンプでなかったのもあるが、意識してクラス全体は口を閉ざしている。

結局教師が解説をする声とシャーペンで書く音のみが聞こえて授業を終えた。

そして約一週間、教師が「ここは何だと思えますか？」なんて訊いても誰も答えないという異常事態が続いた。時には短気な教師が応えないことに腹を立ててやぶから棒に机を蹴ったり適当な生徒に大声で喝を入れたりもした。もちろん、そんなことをされては逆効果である。よほどおおらかでマイペースで本当怖いものなしでない限り、その状況を打破するのは無理なことであった。

また、氷咲からその1週間で他のクラスで3人が落とされたと聞いた。

4月13日、クラスで委員会や係活動などの役員を決める話し合いが行われた。

担任の豊田先生から一通り説明を受けたあと、手を上げて立候補して決めるらしい。委員会よりも係活動の方が若干面倒ではあるが、失敗しても大きな責任を問われることはないし気軽にできそうだからという理由で、僕は次の授業の持ち物等を聞く教科係に立候補することにした。

最初は委員会に入る人を決めていたが、半分しか決まらなかった。多分係活動の立候補者が沢山出るだろう。

案の定、係活動は倍率が低い。教科係は2人定員に7人も立候補した。その中に僕も入っている。じゃんけんで決着を付けることに

し、僕は見事最後の3人まで残った。ここで負けられない。さいっしょはグーっと思いたいところだったが

「うち絶対あやちゃんと一緒じゃないとイヤだから、譲ってよ」と、二人の内の一人が言った。ちなみに二人とも女子。

「わわ、私も…三雪^{みゆき}ちゃんと一緒がいいな」

そのあやちゃんとかいう人も恥ずかしそうではあったが二人一緒に求めた。

しかし、ここで引くわけにはいかない。ここで引き下がったら委員会活動しか選択肢がなくなる。まあクラス代表というのもあるが論外だ。とにかくここは正々堂々と…

「んー、どうしましょかねえ？」

豊田先生が中に入る。

「じゃあここ…」

はじゃんけんで！と言おうとしたが途中で先生につつかいを設けられた。

「あーあー、私はクラスにとって一番良くなるような選択肢を選びたいの。だから、大泉くんには…そうね、髪の毛が少し長くて校則違反だから譲らないといけないことにしますね。ほら三雪さんもそんな怖い顔しないで」

な、なんだと…。僕は髪の毛を手で触って確認したが、耳のあたりの毛が微かに耳を隠している。

「じゃあ、大泉くんは会長にでもなりなさい。あなたにはピッタリでしょう」

会長…ってクラス代表のことじゃねーか。それだけは勘弁だ。

「先生、俺保健委員がいいです」

「そーです、大泉くんは校則破りの悪者です！会長には向いてません」

氷咲が余計な言葉が入ったフォローを入れる。クラスからはくすくすと笑い声が聞こえた。

「そうですか…ならクラス代表はどうしましょうか」

先生があたりを見回す。とりあえず僕が会長になることは避けることができた。ナイスだ、氷咲。

「美穂さんどうです？」

美穂さん？ほらほらと先生が手を軽く開いたり閉じたりする先には、なんとあの日にこっぴどく叱られた気弱そうな女の子であった。「やってもいいです」

美穂はそう言ったが、これは男としてはどうなんだ。自分が嫌だからってこんなか弱い女の子に押し付けちまうのか？でも会長はやりたくないし、でも……。そうだ、本人にちゃんと訊こう。あとで逆恨みなんてするわけ無いだろうけどされては困るからな。

「その美穂さんとかいう人、本当に会長になってくれてもいいのか？」

小声で尋ねる。

「嫌だけど、やる。」

聞こえないくらい小さい声だが声帯は通っている。こんな小さい声出せるのか、ってくらいだ。

「嫌ってどういう事だ」

「やりたくないけどやらなければならない。そうせんせ……」

「美穂さん、それ以上言っではいけませんよ？」

豊田先生が遮る。

言葉は途切れたが、僕は理解できてしまった。本心はやりたくないのに先生にやれと言われている。そうだろう。

僕はどうすればいいんだ。楽な方をとるのか、プライドと女の子を守るのか。

「やっぱり俺が会長になります」

衝動的にそう言ってしまった。ああ、なんてこった。会長になってしまったよ。僕にそんなことはできませんよ。

「男に二言はありませんから、決定ですね。みなさん、このクラスの代表は大泉くんになりました」

正確には三言目だが。

拍手が僕に送られた。しかし、それはおめでとつではなくありがとつこの拍手であるつ。

授業後の休憩時間、僕は氷咲に話しかけた。

「なあ、俺つて落とされたのかな」

豊田先生に究極の選択肢を迫られて会長になってしまった僕はそつなのかもしれない。

「え？バカじゃないの」

笑いをこらえながら氷咲が言つ。

「真面目に答えてくれ」

「だつて、会長になりますつて自分が言つたんだからそりゃあ、なつちやうのは当たり前前でしょー」

それはそうだが…

「あれは完全にヤラセじゃないか」

「でも、断ることができた状況なんだから悪いのは春希くんじゃん？」

泣きたい気分だ。

第五話 おばさん？（前書き）

前話の御復習い

おいしいカレーの給食を食べ終えて、理科の授業が始まったが、教室は静まり返っている。その後1週間ほどは先生が質問してきても誰も応えないという状態。そして13日、役員会を決めるところで豊田先生は先日こっぴどく叱られた美穂を会長に推薦する。しかし、美穂は本当はなりたくない。僕は男のプライドというものが発動し、自ら会長（＝クラス代表）になると言ってしまった。

第五話 おばさん？

クラス代表というのは、様々な仕事をこなさなければならぬ。毎時間の授業の最初に号令をかけ、不まじめな生徒がいれば注意し、クラス内でのアンケートなどを集計し、代議員会という生徒会からクラス代表への伝達をする会に出席し……。ほかにもたくさんある。これほど面倒な役職はないだろう。責任も重大だ。

会長なんだからもう少しシャキツとしてだとか、会長なんだからそうじを一生懸命やれだとか、会長なんだからもっとクラスをまとめる責任があるだろうとか、いろいろ会長だからという理由で些細なことも口をはさまれるようになった。僕はすっかり悄しよげてしま

う。

「ふーん、春希くんもこんな顔するんだね」

「こんな顔とはなんだ。少しは俺をいたわってくれよ」

教師の注意はまるでレーザー光線のように細く、直線的で、強力。

「えー、だつて自業自得でしょ？あれ」

「おまえなあ……」

人の気持ちを考える力を身につけて欲しい。

「氷咲ちゃん、仲いいんですねー」

氷咲をちゃん付けする人は女子しかいないと思ったが、それはあのぼつちやり男の佐藤だった。おまえが女子をちゃん付けするのは誰が見ても気持ち悪いぞ。

「いやー、それほどでも」

氷咲が軽く手を上げる。

「おい氷咲、この佐藤って誰なんだ？知り合いか？」

お前には全く合わないと思うぞ。

「あー、この人はただの友達。絵がすつごくうまいんだよ」

そりゃ手本なしであれだけ書ける奴は少ないだろうな。美術部で大活躍できそうだ。

「大泉さん、あなたにも何か描きましようか？幸運星とか涼宮とか天使鼓動とか、なんでもいいですよ。それから…あ、じゃあ似顔絵にしますか？結構自信あるんですよー。」

佐藤はいきなりぺらぺらと喋ってくる。こいつは苦手なタイプだ。

「え、遠慮しておくよ…」

「そうですか、でもいつでもお待ちしてますー」
待たなくても結構だ。

それにしても氷咲がこのキモ…あいや、変なやつと友達だったとは。もつとカッコいいボーイとか気の合うガールと仲良くするのが健常者だろう。でも、単純にこの佐藤が描く絵が好きだけだったりするかもな、と僕は氷咲をしばらく見ていた。すると氷咲と目が合ってしまった。氷咲は何見てるの？みたいな目をしてくる。僕はなるべく自然にさりげなく、ピントを奥の窓から見える風景へとずらした。窓の向こうには誰もいないグラウンドが見え、その周りには緑が鮮やかになり始めた木々が立っている。学校横の小さな道では杖を付いたおばさんがゆっくりと歩いている。今にも転びそうだが、杖を器用に使って体のバランスを保っている。歩幅は30cmほどしか無いのに1歩に2秒近くかかっている。あのおばさんはどこへ向かっているのだろう。到着まで何時間かかるのだろう。あ、後ろから宅急便のトラックが来た。トラックはスピードを落とさずいるようには見えない。ヤバイ、おばさんは気づかなまま道路のど真ん中を歩いている。轢かれる、どっちかに避けて、おばさん！

「どーしたの、はるき〜」

はっという情けない声を出して僕は我に返る。

「あーすまんすまん、ついボーっとしちゃって」

「もしかして、あたしの話聞いてなかったとかないよね？」

顔が怖いよ、氷咲。

「そ、そんなわけじゃない。ちゃんと聞いてるよ」

「ほんとー？じゃあさつきあたしがなんて言ったか当ててごらん？」
マズイ。僕が遠慮すると言ってからの会話は一切頭に入っていない。氷咲はどんな話をするだろう。

「えーっと…えっとな…」

「ふーん…聞いてなかったんだ」

「すみません、全く聞いてませんでした！」

氷咲はもうつと言いつつ軽く一発ポカリと僕の頭を叩たたいた。

今日はどこのクラスでも落下者は出なかった。現在2日に1人のペースで誰かが落とされ、その人は大変苦しい思いをしている。そう考えると僕はすごく幸運なのかなと思えてきた。校則破りを2回もなぜか見逃され、おまけにボディーガード（正確にはメンタルガードというべきか）まで付いている。頼りになるのかならないのかなんていう人だが。今日もまた他のクラスでは教師が吠えている。落ちた人を庇う人もいたが、余計な口を出すと言わんばかりにその人も落下者になりかける。もはや誰も逆らえない状況が少しずつ形成されている気がした。

「なあ氷咲、俺って…」

「どーしたの、急に」

「俺って…このままでいいのかな」

「だからどーしたーのー」

「どうしたのって…。俺はこのまま落ちていく人を見て、ただ見て自分だけ氷咲に守られてさ、落ちないでこの立場に居座るのは、あの意味幸運なのかもしれないけど、落ちた人には申し訳ない気がするんだ。」

「どーしてそーいうこと考えるの？」

のんきに返してくる。

「俺は…何かしないと罪悪感を感じるんだ。自分は楽しんで、なんにもしないでこの立場にずっといることに」

「うん。やらないといけないことはたっくさんあるよ。でも今やる

「ことは何も無い」

「なんでだ？」

「今春希くんは今みんなと同じ立場でしょ？だから、今のうちは何もしくもいいってこと」

なるほど。なら、こういう事を考えるのはまだ後の話ってことにしておいてもいいってことか。

「変なこと言つて悪かったな」

「うーんうーん、いつものことだから」

「え？いつものこと？」

「え、いやいや…えっと、あたしに話しかける人は、へっ、変なこと言つう人が多いから」

「そうか」

皆に変なことを言われまくる人なんてそうそういないと思うがな。気が軽くなったので、再び窓の景色を見た。おばさんはさつきから5メートルも進んだらどうか。他急便のトラックはいつの間にかいなくなっていた。おばさんが避けたか、諦めてバックしていったか。今の様子からして後者だろう。ん？あのおばさん、耳になんかつけてるぞ。

「おい、氷咲、ちょっと来いよ」

「あたしに命令？」

「いいからいいから」

僕はおばさんについて、歩行スピードが異常に遅いことと、耳に何かを付けていることを話した。氷咲は視力がいいので僕の代わりに見てもらった。

「んー、おばさんが耳につける物って言ったら補聴器ぐらいしか無いと思うけど…あ、でもそこから白っぽいケーブルが伸びてるよ」「いい年して音楽でも聞いているのか、あのおばさんは。」

「あ、あっち向いちゃった」

おばさんは額の汗を拭いている。4月中旬とはいえ、おばさんにとつてはつらい運動となる歩行は体温調節を必要とするようだ。

2人でもはや怪しいくらいおばさんを観察していた。アリを観察するようにどこかハマるところがあったようだ。

すると、おばさんと僕たちと目が合った。おばさんはじっとこちらを見ていたかと思うと、さっきの鈍足歩行とは違ってかわっていきなり走り出した。おばさんとはいえない若々しい走りを見せる。何だあの人は。おばさんの姿はすぐに建物の影で見えなくなってしまうた。

「な、なんだあのおばさんは」

僕は驚きを隠せない。

「あれ、おばさんに変装した若い人なんじゃないの？」

「かもな」

それはただの出来事にも過ぎないほどのことだったが、その後から学校で異変が起き始めた。

外部への情報漏洩対策は厳しいものの、服装や態度などのことは細かくは言わないようになり、落下者も1週間の間1人も出さなかった。

もしかして…

第六話 部活動（上）（前書き）

前話の御復習い

氷咲と佐藤が友達関係であることを知った。氷咲と会話中に窓の向こうに今にも倒れそうなよぼよぼおばさんが歩いていった。そのおばさんはイヤホンのようなものをしており、こちらと目が合うと一目散に全速力で逃げるように走っていった。それからというものの、1週間落下者が出ず、平和な日々を過ごしていた。この影響はもしかしたらおばさんにあったりして、なかったりして。

本話の一部に「オタク用語」のような現代的造語を喋るシーンがあります。苦手な方は注意してください。

第六話 部活動（上）

「しかし、最近平和になってきたなあ」

僕はそんなのんきな声を出した。最初の落下者だった美穂さんも落ちていない人々と同じように扱ってもらえるようになった。

クラスもようやく打ち解けてきた感じた。

「最初はほんとうにそうだと思ったけど、やっぱり村八分とか奴隷扱いとかはないんじゃないのか？」

氷咲に訊いた。

「でも、そんなはずないと思うんだけど…どうしてだろ」

「平和なんだから、それに越したことはないじゃないか。何時までも疑ってちゃ、頭がおかしくなるぞ」

「うーん、そーだねえ…」

氷咲はどこかに雲があるようだ。いまいちすつきりしない様子。

今日から、部活動見学が始まる。放課後に上級生が活動している部活動を見に行くのだ。この学校は運動部に力を入れているため、活気があるのは運動部だ。部員数も多い。でも、運動部に入る気はなかった。基本的に運動は嫌いだし、暑い夏にもたらだら汗流す心理がわからない。文化部の方が多少つまらなくても楽だ。

僕はひとつずつ部活動をまわっていくことにした。部活には必ず入らなければいけないので、たとえばいれそうな部活がなくても入らなければならぬ。

最初は美術部。部員数は一〇人で、全て女子。できたら入りたくない。特にかわいい人もいないし。美術室には、佐藤が見学していた。

「やっぱり絵好きなのか？」

「ささやくように佐藤に訊いた。」

「はい、美術部に入ろうかと」

やっぱりそうか、女子群の中に入るのは気が引けるが、それを超える情熱があるんですね。がんばってくださいな。

やはり僕は美術の才能がないみたいで、たった五分で美術室をあとにした。

次は、家庭部。家庭部という部活名は訊いたことがなかったが、元は手芸部と料理部の二つにわかれていたものが統合されてできたらしい。まさに、家庭的だ。

僕は調理室に入った。すると、甘い香りが僕の肺に入ってきた。今、ホットケーキを作っているところだった。釣られそうだったが、良く考えてみれば手先は器用ではないし料理も家庭科の授業以外はやった事が無い。これも没かな。

そして、吹奏楽部、茶道部、書道部、新聞部と見て回ったが手ばかりはなし。残る科学部に望みを託す。

理科室のドアをゆっくりとスライドさせた。しかし、誰もいなかった。あれ、今日は休みの日だったわけ。でも休みは土日祝水となっている。今日は月曜日。部活は行われているはず。机の上には顕微鏡やピーカーなどの実験用具が散乱している。

顕微鏡がある机にはA4の紙にマジックでこう書かれたメモが残されていた。

「見学感謝。触感自由。破壊不可。破損時準備室入室。質問所有者準備室入室。以上！」

急いで書いたためか字が汚い。顕微鏡を覗き込んでみたが、ぼんやりしてよく見えない。ピントはどこで調節するんだったかな。考えてみるが、どこを触っていいかまったくわからない。レンズとその下にあるガラスがくっついていそうなくらい近くにあって、反対に回すとそのガラスが割れそうだったからうかつに触れなかつた。

僕は質問所有者準備室入室という言葉は「質問がある人は準備室に入ってね」という意味だと解釈し、理科準備室のドアノブに手を掛けた。

「うわっ」

僕が入った途端中の人々が驚いたことに驚いてそんな声を出してしまった。

準備室には八人くらい人がいた。

一人の男が腕をべったり机につけて隠している中からUNOのカードが一枚落ちた。

五秒ほど沈黙が続く。

「あ、あー…な、なんだ部見学の人か」

一番手前にいた女の人が言った。

「おーびっくりしたー、てっきり先生かと思ったし」

「おい、UNO隠さなくていいぞ」

「あいつ誰だろ」

つられて他の人もがやがやと話を始める。

「質問かな？」

最初の人たちが立ち上がって僕に訊いてきた。部長だろうか。

「あー、顕微鏡のピントがわからないんですけど」

「あー、それね。調節してあげるから、ほら」

ピント調整はあつという間に終わるかと思ったら、意外と梃子摺ていすずっている。

「あれー、おつかしいな」

しばらくしてその原因がわかる。

ステージにスライドガラスしか乗っていないかった。カバーガラスごと見るものが取られていたのだ。これでは何も見えないはずだ。

「ごめんね、顕微鏡は今使えないみたい」

すると準備室から男がぞろぞろとやってきた。

「しっし！おまえらが来たら印象が悪くなるだろ」

女の人々が怖い口調で男を追い払おうとする。

「僕一人しかいませんし、別にいいですよ」

本音は「女と二人きりだから嫌」だ。

僕の願いを聞き入れてくれ、女の方は男の人達が入るのを許可した。理科室が賑やかになる。

「おーかわいいー。やっぱ一年なったばかりだもんね」

「お前シヨタコンだったのか？俺は知らなかったぞ…」

「んな訳ねーだろ」

「肌がトウルトウルしてるぞ」

「おーマジか」

さりげなく僕の頬を突っついてくる。ど、どうしたらいいのだ。

「ねーねー、君名前は？」

まともそうな男が僕の後ろのほうで訊いてきたので応えた。応えようとした…。

「えっふあ、おおいういあるしっふえ言いあう」

顔をいじられててうまく発音できない。そして暑苦しい。

「こらやめんか！だからお前らは…」

よく見れば唯一の女であるあの人々が止めてくれた。

「すまないね。こいつら調子になるといつもこうで」

「いえいえ…」

やっぱりこの人がリーダーっぽいな。

「で、名前は何？」

リーダーさんは僕に改めて訊いてきた。

「大泉春希です」

はつきりと言ったつもりだが、群衆の中へは違う発音に聞こえたらしい。

「え？ハルヒ？」

男軍団のひとりが言った。

「はるきーです」

「大泉春希くんだったって！」

リーダーさんが男軍団を睨みつけながら強い口調で言った。軍団静まる。

「ちなみに、この科学部へ入部する気はありますか？」

最初に名前を訊いた男が尋ねた。ちなみにメガネをかけている。「まあ……。あります」

しり込みするような言い方ではあったが、一応希望意識があることを伝えた。

「うおー」

群集、騒ぐ。

「そうとなれば自己紹介だ。私は部長の坂本瑞稀^{さかもとみずき}。そのメガネは副部長の松下零二^{まつしたれいじ}よ」

よろしく、とメガネをいじる松下さん。

「その下品な群衆は紹介いらさないね」

「えー、なんでだよー」

群集、反抗する。

「仕方ないわね。左から高木、北本、吹田^{すいた}、黒瀬、初沢、鈴木、川上、赤峰。」

坂本さんは面倒くさそうに名前を読み上げるように紹介した。よくわからなかったが、そのうち覚えれるだろう。

「他に部見学に行く予定の場所は？」

坂本さんが優しい声で訊く。女性独特の綺麗な声。

「ないです」

「なら、……」

坂本さんを遮って松下さんが

「ゆっくりして行ってね」

と言った。

その後、時間いっぱいまでトランプをしたり、オセロをしたりして過ごした。

入部届けを出すのは5月の頭までだが、僕はここに入ろうと決めた。

第六話 部活動（上）（後書き）

どうも、こんにちは。読んでいただきありがとうございます。

この小説は、投稿前に何話が貯めておいたものを2、3日定期で話を投稿していったものでしたが、貯蓄話がそろそろ尽きそうなので、更新定期が週1くらいに減るかもしれませんが、（・・・）スマソ乱文にならぬように努めています。既に崩れかけていますね（汗）気を付けなければと思っています。

私の中では一通りストーリーを考えてありますので、連載休止ということはないです。私になかなか投稿しなくても、密かに待っていてくれたらいいなあ…なんて。
これからもよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3262n/>

理不尽から守ります。

2010年10月8日14時24分発行